武庫川つくりの提案

日本の川は急勾配で流路も短く、短時間で流下し、最大水量と最小水量比では淀川１／３０、利根川１／１００と言われ、テムズ川１／８、ミシシッピー川の１／３に比べるとまるで滝と言っても過言ではないでしょう。武庫川も、日照りが続く夏場の川底は干上がり、梅雨時期には川幅一杯の急流になります。台風や梅雨時期の豪雨が続くと、上流に降った雨は数時間後には洪水となって下流に押しよせ水害を起し、好転が続くと川底は干上がり渇水被害をもたらしてきまし、流域に暮らす人々は常に洪水や旱魃との戦いを繰り返されてきました。武庫川を歩くと、今もその名残が随所に見られます。

阪神武庫川駅から少し上流にある、素盞嗚神社の石碑には『この辺りの古代は、地理的な条件から海状時代が長く、奈良・平安朝の頃漸く砂州から陸地がつくりだされました。尼崎地方では比較的遅く開発され、西新田と呼ばれました。素盞嗚神社は新田の氏神として祭祀されたのです。江戸時代まで牛頭天王社と呼ばれていましたが、明治の制度により現今の社名が定着します。明治の頃まで「あばれ川」「人喰い川」と恐れられてきた武庫川の度重なる氾濫は、後世の各村文書である正徳二年（1712）や、元文五年（1740）の記録にも見られるように流域の被害は大きく、洪水からの鎮護を込めて当社の境内にも元文三年（1738）の鳥居や寛保二年（1742）の灯篭が建立祈願されたものとうかがわれます。』と洪水と戦った歴史を伝えています。

左岸（宝塚・尼崎）側では川面、小屋井、富松、生島、武庫、水堂、守部、の取水樋が、右岸（西宮）側には武庫川の上流から天井川である仁川の下に用水トンネルを掘り百間（約 180m）樋を伏せた「百間樋」が今も残されています。渇水時の水争いの記録も残され、命がけで水と戦っていた跡が残されており、足りなくても、過剰でも命に関わるのが水ではないでしょうか。この流域で暮らす者にとって、生活用水の確保（利水）と、災害から生命財産を守る治水は、必要なときに必要量の水を確保し、過剰な水は速やかに流しさり去るという貯水と排水と言う、相反する事柄を同時に解決する難事業が流域に人が住み始めて以来営々と続けられてきました。先人の知恵に習い、今の時代に合った武庫川との共存をはかる事が大切だと思います。

- **武庫川の特徴**
  - **上流域**：比較的緩やかな流れが盆地の中を蛇行して流れている。老年期に入った周辺の山々は安定しており地滑り山崩れの危険性も低いと思われる。
  - **中流域**：傾斜も急流が岩盤を削り取り狭隘な渓谷状態の手付かずの自然が良く保たれている。
  - **下流域**:緩やかな直線的な流れになり、青年期の六甲山から流れ出た砂礫が堆積し天上川になっている。周辺の開発が進み人口の密集する高度土地利用地域が広がる。
- **上流部の治水対策**

  森林整備を行い、保水力を高めることが望ましいが、それを地主に全て責任を負わせるには負担が大き過ぎ、何らかの公的支援が必要になると思います。一つの事例ですが、山林整備に市民参加がし易い環境整備とし、市民が容易に作業を行えるような山道整備を行い、行政・武庫川委員会・地域地主が協力し山林整備のイベントを企画し市民参加の機会を創出することが考えられます。山林整備が市民にとって一つのリクリエーションとして山に親しめるきっかけとなれば、市民にとっても地主にとっても有意義であるばかりか、自分達の手で武庫川を守る意識も高揚する事も期待できるのではないでしょうか。２３号台風で水没した地域は、武庫川の平坦部における隘路になっている場所で発生したものと思います。幸いなことに、堤防が決壊しても一部高くなっていた線路と道路が二次的な堤防の役割を果たした為に被害地域が絞られたと思われます。逆に言えば線路と道路に囲まれた地域が自然の遊水地になったと考えても良いのではないでしょうか。

  上流部の平坦地な流域は、単に堤防を強化だけでは充分とは言えないでしょう。数年・数十年に一度の豪

雨には普段は農地として使い、豪雨時は遊水地として機能するような柔軟な施設を考えても良いのではないでしょうか。遊水地として指定した場合、土地は農地としてのみ使用可能とするなどの使用制限を加えた上で、地主が受けた不利益を公的補填する制度を作って協力を求めれば、地主の理解も得られダム建設より自然に易しく低コストの対策となるのではないでしょうか。

- **中流部の治水対策**

岩盤地帯を流れており、周辺の山からの土砂の流入も少なく、急流が土砂を押し流し堆積し河床高くする心配は少なく、この流域にはダム建設や観光開発を控え、可能な限り人手を加えないのが望ましいと思います。台風２３号で浸水したリバーサイト地区の直ぐ下流の中国道付近は武庫川の隘路になっており、自然の穴あきダムの機能を果たしていたと考えられます。２３号台風では、ここで流量が制限され下流部の被害が免れたのではないでしょうか。前回のミーティングでリバーサイト地区の方からも提案が出されていました通り、お住まいにお方に移転していただき、自然を生かし防災ダムとして整備すればよいのではないかと考えます。

- **下流部の治水対策**

青年期の六甲山系から流れ出る太多川・名塩川・逆瀬川・仁川から六甲山の花崗岩が風化し脆くなって出来た砂礫が武庫川へ流出し続けており、砂礫が堆積し川床を押し上げており、定期的に河床浚渫が必要なる流域であると思います。河床の浚渫に当って現在進められているような、川床を平坦にする方式ではなく、低水量時期にも細い流れが保たれるように一部を掘り下げるような工夫を凝らす事で、魚も住める環境と、夏場の渇水時期にも市民が水に親しめるようになると思う。高河床は現状通り市民の憩える場として、運動場を兼ねた市民広場として利用する事が良いと思う。

- **利水対策**

水量としてはもう充分足りており利水の為のダム建設は必要が無いと考えます。治水の面から考えても２３号台風の事例から見れば、ダムが浸水対策に有効とは思われないばかりか、市民の憩いの場である渓谷を破壊してまでダムを作る事に何のメリットも無いと考えます。

利水は量だけでなく水質の問題も忘れては成らないと思います。生物にとって水質は人間における空気と同じく生命存続の根幹に関わる問題で、水質保全の取り組みは非常に大切なことと考えます。下水道整備・維持管理を確りお願いするとして、我々市民も水質汚濁防止を心がけなければならないと思います。川の上流部の山林の中にゴミが捨てられていたり、何気なくポイ捨てされたゴミが川に流れ出したりと心無い人の行動が水を汚し、汚れた水は膨大なコストを掛けて処理しなければ飲む事もできなくなり結果的に水不足を招いたり、原因特定には至っていないと思いますが、玉瀬浄水場でジアルジアが見つかり社会不安を招いた事例が示す通り、一つ間違うと市民の健康も損ないかねない重大事になりかねないではないかと心配になります。武庫川委員会など市民と行政が協力してゴミ不法投棄防止の取り組みや、清掃活動など啓蒙を図る一方、不法投棄に対する罰則強化など法的な対応も行う必要があると思います。

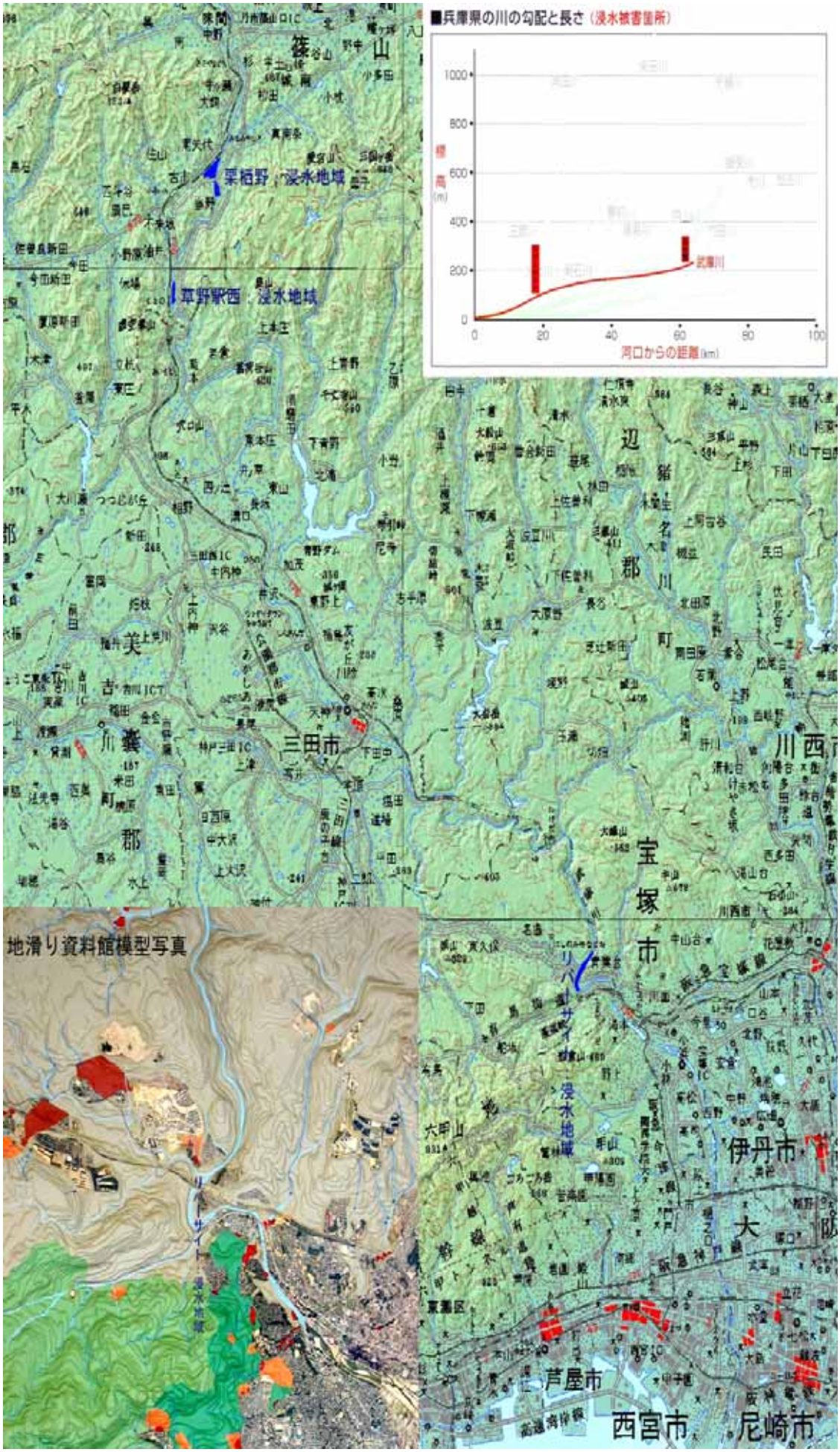
- **その他**

近い将来起こるといわれる東南海地震への備え、何時起こるかわからない災害復興事業など対策を急がねば成らない事案が山積しており、限られた財源をどう配分するかも大きな問題となろう。川も社会環境も生き物と同じで、自然環境も経済環境も変化は思いのほか早いもので一度決めたら其れでお終いと言うのでは無く、武庫川委員会を恒久的な機関として継続し、市民参加の川つくりを推進されん事を望みたい。

添付資料：武庫川流域図

平成 16 年 1 月 25 日

尼崎市：吉田博昭


■兵庫県の川の勾配と長さ（浸水被害箇所）
標高(m)
河口からの距離(km)
武庫川
栗栖野・浸水地域
草野駅西・浸水地域
三田市
宝塚市
川西市
伊丹市
芦屋市
西宮市
尼崎市
地滑り資料館模型写真